

承明門院小宰相全歌集成

山崎 桂子

鎌倉中期の女流歌人である承明門院小宰相の和歌と生涯を研究するにあたり、その前提としての作品集成である。歌合・定数歌・勅撰集・私撰集等から二七一首を拾い、年次順に配列、他出状況とその異同をも注した。

キーワード…承明門院小宰相、土御門院小宰相、家隆女、和歌集成

はじめに

承明門院小宰相（土御門院小宰相とも）は家隆女で、承明門院在子（後鳥羽天皇中宮、土御門天皇母）に仕えた女房歌人である。若き日には土御門院の寵愛を受けたこともあったらしい（『増鏡』）が、中年からは後嵯峨院歌壇で活躍、晩年は鎌倉へ下向し宗尊親王家にも出仕している。和歌は『宝治百首』『基家百首歌合』の他、数十首が残されており、『新勅撰集』以下の勅撰集にも三九首入集する。この時期、為家と対立していた真観の反御子左派と親交があった点も注目される。また、『なよ竹物語』（『古今著聞集』にも）に登場し、「源氏絵陳状」でも知られる。

しかしながら、家集や散文作品（『小夜衣』の作者かとする説もあるが）を残していないこともあってか、寺本直彦

氏が「源氏絵陳状」との関わりで論じられた（『源氏物語受容史論考』昭和四五年、風間書房）他には、本格的な研究を見ない。伝記的には未詳な点が多いながらも、和歌や逸話・事蹟等から描き出される生涯には同時代の阿仏尼・後深草院二条などに通うものがありそうである。

本稿は、このような中世の一女流の和歌と生涯に光をあててみようとする一連の研究の前提として、残された和歌作品の集成を行うものである。遺漏もあろうかと思われる。大方の御教示を賜りたい。

一、集成歌の概要

承明門院小宰相の和歌で現存するものは、重複を除くと二七一首。その内訳は次の通りである。

一、定数歌・歌合からは、嘉禎二年（一二三六）『遠島歌合』一〇首、宝治元年（一二四七）『宝治院歌合』一〇首、宝治二年（一二四八）『宝治百首』一〇〇首、建長三年（一二五一）『九月十三夜影供歌合』一〇首、建長八年（一二五六）『基家家百首歌合』七七首、弘長二年（一二六二）『三十六人大歌合』五首、文永二年（一二六五）『八月十五夜歌合』五首の二七一首が集成される。『基家家百首歌合』は本来百首あったものと思われるが、近年紹介された逸翁美術館蔵本でも欠損部があり、恋・雑部が七首しか拾えないので、現存は七七首である。弘長二年の『三十六人大歌合』は、將軍宗尊親王の命により基家が当時現存の三十六人の作を撰んで番ったものであるが、小宰相については五首共既出歌である。従って、この五首を除くと二二二首となる。この他に、証本は散逸しているものの小宰相が参加したと思われる歌会・歌合が勅・私撰集の詞書等から想定されるが、これについては次稿以下で考証と併せて述べたい。

二、勅撰集では『新勅撰集』以下に三九首入集するが、独自の逸文は次の一二首である。（一）内は入集数。『新勅撰集』二首（二首）、『続後撰集』二首（六首）、『続古今集』四首（一二首）、『続拾遺集』一首（四首）、『新後撰集』一首

（二首）、『続千載集』〇首（二首）、『続後拾遺集』〇首（一首）、『風雅集』〇首（一首）、『新千載集』〇首（一首）、『新拾遺集』二首（四首）、『新続古今和歌集』〇首（四首）。

三、私撰集では『万代集』以下『夫木抄』までに九〇首が入集するが、独自の逸文は次の六首である。（一）内は入集数。『万代集』六首（一二三首）、『現存和歌六帖』一二首（一八首）、『現存和歌六帖抜粹本』一首（三首）、『秋風抄』四首（八首）、『秋風集』一首（一一首）、『雲葉集』四首（九首）、『夫木抄』一八首（二八首）。『現存和歌六帖』は、後嵯峨院の命により真観が現存歌人一三五人の和歌八七五首を古今和歌六帖題の第六帖分に相当する題で集成したものの（第二次本）で、大永七年（一五二七）三条西公枝が第三次本「現存和歌六帖」から抜粹した本も知られる。これらも私撰集としてここに入れた。

四、その他として『増鏡』第三藤衣に哀傷歌一首が見える。

※

以上の二七一首に歌番号（歌頭、算用数字）を付し、定数歌・歌合はその催行年次、撰集類は成立年次による年次順に集成した。また、それぞれの資料にも a～z の記号を付し、独自逸文数と入集数を（ ）で示した。詞書・作者書等は除外し、和歌本文のみを『新編国歌大観』の表記によって初出資料で掲出。歌末には各資料に於ける新編国歌大観番号（漢数字）を付した。他資料に重出するものは、その資料名（略称）と新編国歌大観番号（漢数字）を注記、本文に異同がある場合は異文（わかりやすくするため表記は集成和歌に合わせた）をも注記した。

二、全歌集成

a 増鏡（1首）

1 憂しと見しありし別れは藤衣やがて着るべき門出なりけり（四一）

b 新勅撰集（2首）

2 つきの色もさえゆくそらの秋風にわが身ひとつと衣うつなり（三二七）

3 おほかたのかすみに月ぞくもるらむ物思ふころのながめならねば（一〇三八）

c 遠島歌合（10首）

4 浦人のしほやく里のあさ霞春の物とやわかでみるらん（四）

5 まがひこし雲をばよそに吹きなして峰の桜にはふ春風（二〇）

6 さとわかずなけや五月の郭公忍びし比は恨みやはせし（三六）

7 さだめなき風を待つ間もうつろひぬもとあらの萩にむすぶ白露（五二）

8 つれもなきつまをやたのむ秋風の身にさむき夜は鹿も鳴くなり（六八）

9 神無月木の葉しぐれぬ比ならばさのみねぬ夜の数はつもらじ（八四）

10 おもふともこふともしらじ山城のときは森の色にみえねど（一〇〇）

11 としをへてつらき心のかぎるをも見はててよわる玉の緒もがな（一一六）

12 ふる郷のたよりもしらぬあら磯に涙ばかりぞ袖にかけける（一二二）

13 すみかふる深山のおくにしられけり我が身をさらぬ浮世なりとは（二四八）

雲葉六六・わかず

新拾遺八八

続古今二二六、万代六〇三、雲葉三〇三

秋風抄六二・待つ間に、秋風集三五六、現存六帖八一

続古今四四一、万代一〇七五、雲葉四五五・鳴くなる

新続古今六一八

続後撰六六五・色しみえねば、万代一七九六・色しみえねば

続後撰七二三、万代二六〇〇・かぎり、大歌合六〇・かぎり

d 宝治院歌合(10首)

14 春きてもなほ氷しく衣川霞もいくへたちわたるらん(二)

15 雲のうへの山もこだかき桜花みよの盛の春にあふらん(二八)

16 おのがつまいかに契ればほととぎすき月の空をわきてとぶらん(五四)

17 萩のはに声たてねどもふく風の身にしむ色に秋ぞしらるる(八〇)

18 わかのうらやおなじながれの君がよにまた立出でて月をみるかな(一〇六)

19 みなせ山ちかきみかりのおもかげやかたのの雪に猶のこるらん(一三二)

20 人しれぬ心にふるすとし月を命となれる程ぞつれなき(一五八)

21 したの帯のあだにむすびし中なればめぐりあふべき限だになし(一八四)

22 いくかへりなれぬ嵐もしぐるらんみやこを忍ぶよはの枕に(二一〇)

23 石清みづながれてきよきわが国を君の心に千よもまかせよ(二三六)

e 宝治百首(100首)

春

24 立ちそむる春のけしきのしるければ年を残して冬や行くらん(三五)

25 嶺にゐる雲のとだえもわかぬまで霞ぞかかる葛城の山(七五)

26 衣手のもりの木本跡たえておりはへのこる春のしら雪(一一五)

27 あさなあさな鳴くうぐひすのこゑならで我が身にうとき春の色かな(一五五)

28 これのみぞおのが春とて山がつの野ざはのわかなつみにいづらん(一九五)

夫木九六六〇

続後撰六七六・とし月の

雲葉二九

- 29 かきくもりみぞれも雪もふりまぜてさえくらしつる昨日けふかな（二三五）
- 30 梅花色をのこして吹く風はかこそあはれとおもひそめける（二七五）
- 31 棹姫の手ぞめの糸の青柳を道のゆききに春をへてみる（三一五）
- 32 おきもせずねもせぬよはの名残かは雨ふりくらすけふのながめは（三五五）
- 33 初草のそれともみえぬ末葉よりやがてもぬるる春の朝露（三九五）
- 34 かすむよの木間もりくる影よりぞ月に哀をそへてみるらん（四三五）
- 35 帰る雁たがいつはりにならひてか心もとめぬそらになくらん（四七五）
- 36 待つこともめかれぬ花のおのづからいつの人間にいそぐなるらん（五一五）
- 37 いとまありてなれぬる身をも思ひしれさりととも花はなさけわくらん（五五五）
- 38 ちらぬより花の姿ややつるらんとにをりて帰るさと人（五九五）
- 39 をしむとてとまる習もなき花にさのみ心をつくさずもがな（六二五）
- 40 ちるとみてえやはうらむる山桜思ひますべき花しなければ（六七五）
- 41 くれぬとて人もとまらぬ離にはさく山吹の花の名をし（七一五）
- 42 いかにしてときはの松のおなじえにかかえる藤の花に咲くらん（七五五）
- 43 けふの日も入あひの鐘のこゑきけばいかにとむべき春の別ぞ（七九五）
- 夏
- 44 花の色の袖はさながら夏衣かさなるけふの習なりせば（八三五）
- 45 時鳥たよりをしへよ卯花のかげにしのぶるかげだにもせず（八七五）

万代一二五・そめけめ

現存六帖七八二・ならひきて・そらにしもなく

秋風集七七・思ひみし、現存六帖四一六

現存六帖四二六

続千載一八八

続拾遺一四二

46 郭公こゑのかぎりをつくすべきおのが五月といまぞしりける(九一五)

47 早苗とりおりたつたこのけしきまでをさまれる世はまづしるきかな(九五五)

48 いかばかり谷のいはかきこえつらん川音たかき五月雨の比(九九五)

49 すずしさはくれ行く空もなかりけり風吹きわけぬ草のしげみに(一〇三五)

50 木間行くほどだにをしき夏の月山のはにげよ空にのこさむ(一〇七五)

51 くれにけりすだく螢の数数に名もあらはるる井での玉水(一一一五)

52 夕立の雲路はるかになるままに入日色こきにしの山のは(一一五五)

53 みそぎする河せずしき風の音は秋の色にや吹きかはるらん(一一九五)

秋

54 秋きぬといふばかりなるながめより昨日にはにぬ明はの空(一二三五)

55 まれにあふ七夕つめにかすことはちよを一よにひきもとめなん(一二七五)

56 秋ごとに物おもふことのしるべする風のやどりや庭の萩はら(一二一四)

57 宮木のの木の下とほき萩のえにおのれと結ぶ露ぞうつろふ(一二五四)

58 身にしてみて雲のはたてを吹く風やあやしときさし夕なるらん(一三九四)

59 こしの海をいつか出でけんあまを舟初かりがねぞ空にきこゆる(一四三四)

60 山里はわさだかるよりしられにし秋のけしきぞふくなり行く(一四七四)

61 あかしかねつまだふ鹿の秋のよをあふ人からとたれをしむらん(一五一四)

62 我がためになく虫のねにあらねどもねざめなればやかなしかるらん(一五五四)

現存六帖七六二

万代一一四四、雲葉六五〇、大歌合五四

- 63 秋のよは空行く月もしら鳥のさきさか山の名にぞすむらし（一五九四）
- 64 ひかりそふ月のためとやくるよりひら山おろし海に吹くらん（一六三四）
- 65 我がままに野守はみるや秋の月草のいほりを露にまかせて（一六七四）
- 66 月やどるよどの河舟この程は心すみてぞ行きかへるらん（一七一四）
- 67 こぬ人にみせもきかせばとひやせん月にさえたる庭の松かぜ（一七五四）
- 68 ふかき夜と人はやすらふ関の戸に霧立ちてけり足柄の山（一七九四）
- 69 きく人の身にしむ秋のつまざとも思ひも入れずうつころもかな（一八三四）
- 70 さかづきの千代の光も長月のけふや昔ときくぞうつろふ（一八七四）
- 71 としつもの老その杜の紅葉とてむすびやそむる秋の初霜（一九一四）
- 72 たかねよりおちてながるる山河にかつがつかはる風の白川（一九五四）
- 73 けふばかりまさ木のつなをかけてだにとめてもみばや秋の別を（一九九四）
- 冬
- 74 さらに又おのれ時雨れてつげずとも人やはしらぬ冬のくるとは（二〇三四）
- 75 花ゆゑはまれなる人もまちなれてもみぢふりしく比ぞさびしき（二〇七四）
- 76 いづれぞと草のゆかりもとひわかぬしもがれはつるむさしののほら（二一一四）
- 77 うちたえてふるとはふらぬ雪なれどあさが庭ぞしろく成行く（二一五四）
- 78 けぬがうへにいくへもつもの雪みればいづくもおなじ山はふじのね（二一九四）
- 79 池にすむ鳩の浮すも中にこほれる程やたよりなるらん（二二三四）

秋風抄七九、秋風集三三八

新後撰四一五

続古今五九〇・とひわびぬ

80 たち渡るをとめの袖もこのへのみはしの霜やさえまさるらん (二二七二)

81 峰の雪汀の水かげそへてまきのを山に月ぞかかれる (二三一二)

82 あはれとや老のね覚のあかしがたとひがほにしも千鳥なくらん (二三五二)

83 身にそへて行くとし波にあらねどもくるをいかにをしみそめけん (二三九二)

恋

84 目にはみて雲井のよそに行く月のたよりもしらぬ我が思ひかな (二四三二)

85 君があたり伊駒の山はよそながらへだつる雲の色もはかなし (二四七二)

86 思ひきや涙にしはる袖に猶身をしるあめをそへん物とは (二五一二)

87 おのづから風のとよりを待ちえてもなぐさむ程のことのはぞなき (二五五二)

88 煙たつなだの塩屋を尋ねともたきもすさまぬこひやなからん (二五九二)

89 まれにだに逢ふ事かたき道なれど一筆みせよ文字の閑もり (二六三二)

90 せきかぬる滝つ心は音羽川ながれてのちに逢瀬ありやと (二六七二)

91 色かはる人にみせばやとしふれど秋にしられぬひばら杉はら (二七一二)

92 行末のながきちぎりもたのまれず身をうちばしのたえまたえまに (二七五二)

93 みるめなきおなじみなどにとどりわびたななしを舟こぎや出でなん (二七九二)

94 祈りこししるしもみえず神山のしひしばがくれしのびはてなで (二八三二)

95 かひなしや我のみふかきおもひにはむぐらのやどに袖をしきても (二八七二)

96 なぞもかく我が身にそはぬかげろふのもゆる思ひをむねにしるらん (二九一二)

続拾遺七八一

続千載一三三四

夫木九六〇四・道なりと

現存六帖六六八・みせず

秋風抄二四〇、秋風集八八六

- 97 わが門のいく井はあれどかほより聞きしににたる声だにもなし(二九五二)
 98 つらからで待つ人あらばもろこしのとらふす野べもわけざらめやは(二九九二)
 99 我が恋はあまもかづきぬ波まより手にもかからずうきしづむ玉(三〇三二)
 100 ます鏡うき身の影をうつしても物おもふ人の数ぞそひぬる(三〇七二)
 101 よひよひにはかなき夢のなぐさめも枕さだめていつまでかみし(三一一二)
 102 忍びこし夜はの衣もはては又なみながらぞ色にもえ行く(三一五二)
 103 誰がかたに心いるともあづさ弓ひきののつづらくる夜有りせば(三一九二)
 雑
 104 いかなればうき物といふ有明の月にちぎりて鳥はなくらん(三三三二)
 105 かくれすむ草のとぎしのかひもなし闇あらはるる夜のともし火(三三七二)
 106 なほざりの誰が契より松風のいなばの山の峰に吹くらん(三三一二)
 107 里つづき竹のそのふのちかければうきふししげき身をやかこたん(三三五二)
 108 いくかへり岩ほがうへにひびくらん浪のをかくるからことのいそ(三三九二)
 109 淡路島波もてゆへる山かげに心とけたるとも鶴の声(三四三二)
 110 みづぐきの岡の篠原うちそよぎふみかよひける程は見えつつ(三四七二)
 111 なにはえや風吹きすさむ蘆の葉にすみうかりけん昔をぞ思ふ(三五一一)
 112 霧深き浦路はるかに行く舟の風にまかする跡もはかなき(三五五二)
 113 いつとなく袖山かげに立ちなれて世をふる人の道ぞかはれる(三五九二)

現存六帖八六三(抜粋三八五)・あくひ・だにもせず

秋風抄二三七、秋風集九六一、続古今一三三三

万代二五一八・心よるとも、続後拾遺八五九・心よるとも

新千載一九〇〇・世をや

114 住吉のきしに年ふる苔蒔しきつの浦の浪やかくらむ (三六三二)
 115 つたひくるかけひの水の音にてもすむらん人の心をぞくむ (三六七二)

116 吹きはらふ夜はの嵐のはげしさはならはぬ程ぞふかき山ちに (三七二二)

117 ほしやらで日数もやへむ秋の田のかりほの庵に雨はふりきぬ (三七五二)

118 里遠く入野の末のはつを花露ながらかせ夜はの枕に (三七九二)

119 かりにのみ立ちよる人のならひには誰がなごりをかやどにしのはん (三八三二)

120 一夜だにかたく袖をしぼるかな誰に宮こをとふのすがごも (三八七二)

121 わたつ海や限もしらぬ波のうへもおもへばみちはたゆるものかは (三九一一)

122 神路山もも枝の松もさらに又いく千代君にちぎりおくらん (三九五二)

123 しりにけん朝日の山の光より万代かけて照すべしとは (三九九一)

f 万代集 (6・13首)

124 たつたやまあかつきさむきあきかぜにもみぢふみわけしかのなくらむ (一〇九二)

125 まどふかきこのはやもろくなりぬらむしぐれせぬよもわかぬころかな (一三六六)

126 けふまでもわが身やかはるあすかがは人のちぎりぞふちはせになる (二五四〇)

127 よせかへりなみうつきしにねをとめてつれなきものは人わすれぐさ (二六八〇)

128 ますかがみかげだに見せよやまどりのをろのなが尾のなかはたゆとも (二六九三)

129 ながき夜のねざめにおもふほどばかりうき世をいとふころありせば (三六五七)

9 現存和歌六帖 (12・18首)

夫木抄二二八一

風雅二二八七

続古今一八一五

130 はかなしやこぬ人たのむゆふぐれにのきばのをぎをあき風のふく(九九)

131 つむきくのはなもかひなしはつしものよそにはおかぬなが月のそら(一二一)

132 つれもなきすがたのいけのまこもぐさかりのうき世になほみだれつつ(一五三)

133 たぐひあるうき身もさそへゆくみづにねざしとどめぬくさならずとも(一八〇)

134 あれまさるやどはくさばのかけなればよるなくむしのねをのみぞきく(三〇八)

135 をしはやま神よのはるやちぎりけんにはひもつきぬはなのしらゆふ(四一一)

136 はるをへてよし野のおくにさくはなや人のこころのいろをわくらん(四二二)

137 さくらさくよしののおくにすむ人は風ふくごとにものやかなしき(五八八)

138 あすしらぬわが身ながらもさくらばなうつろふいろぞけふはかなしき(五九七)

139 あかでちるなげきはあれどやまざくらあひみるはるはあまたへにけり(六三二)

140 とひもせでつれなきいろをならへとはたがうをおきしみわのすぎむら(六八九)

141 ほととぎすよそのわかれやうきものとあくるほどなきつきになくらん(八二二)

h 現存和歌六帖抜粹本(1・3首)

142 萩のえに木木のしづくも朝露もうつろひまがふ宮木ののはら(七九)

i 秋風抄(4・8首)

143 雪ふかき木幡の峰をながめてもうちのわたりに人や待つらん(一六九)

144 恋ひそひてたえぬ煙にまがへましあまたにつつむ恋ときかずは(一八〇)

145 いかにせむうき身にかぎる名取川あふせもしらで命たへずは(一八八)

夫木一〇八六一

続古今一五三六、大歌合五二

現存六帖抜粹三三六

秋風集五三六・峰に、夫木九〇五七・人ぞ待たるる

秋風集六九二・たちそめて・煙や・きかねば

秋風集七四八・たえなば

146 身のうさを嘆くにあまる涙こそ忍ぶに堪へぬ色はみせけれ(二二九)

j 九月十三夜影供歌合(10首)

147 草の原まだきに露はむすびけりいくかもあらぬ秋の日数に(二四)

148 吹きかはる風のけしきに成るまに猶すみわぶる秋の山里(六六)

149 露ながら見せばや人にあさなあさなうつろふ庭の秋はぎの花(一〇八)

150 さをしかの鳴く音もいろはまさりけり夕日かかれる秋の山もと(一五〇)

151 しるらめや霧たつ空に鳴く雁はれぬ思ひのたくひある身を(一九二)

152 長月の月にそへてやあかしがた秋のなかばの影のこしけん(二三四)

153 数ならで庵もるしづも月や見るあふたのみある秋の契りに(二七六)

154 かへるさにをりてもゆかん村時雨そめな残しそきぎの紅葉ば(三一八)

155 人しれずむせぶ思ひに恋ひしなばむなし煙や跡に残らん(三六〇)

156 よひよひに月を哀とながめても猶うき人のまたれざりせば(四〇二)

k 続後撰集(2・6首)

157 秋の夜のながきおもひをいかげせん月になぐさむころならずは(三七六)

158 われながらしらでぞすぎしわすられてなほおなじ世にあらん物とは(九六六)

l 秋風集(1・11首)

159 はるは猶かすむにつけてふかきよのあはれをみする月のかげかな(五七)

m 雲葉集(4・9首)

秋風集九二三・みえけれ、大歌合五八・涙にぞ・みえける

続後撰二八八

秋風集三六三、続拾遺五八三

新続古今四八七

続古今七七

- 160 しらまゆみいるさのやまのゆふざりにたちかくれてやさかのなくらん（四八〇）
 161 しがのあまのおもひもはれぬそでもあきはいろそふみやみるらん（五九二）
 162 みやまにもあきはかざりになりにつけりおちくるみづのいろかはるまで（六四六）
 163 おもひやるせきのわらやのむかしまでゆきにさびしきあふさかのやま（八四九）
- n 基家百首歌合（77首）
- 春・秋
- 164 いつのまに春は来ぬらん野も山も道のしるべと霞みそめつつ（一一）
 165 あまの川川音すみてひこ星の妻むかへ舟待つやひさしき（四〇）
 166 鶯のぬれつつなけば春雨の降るをなみだにかかるとぞみる（一三九）
 167 つれなくもふりぬる身かなもちどりさへづる春も又めぐりきて（一五三）
 168 さきそむる軒ばの梅の花がたみめならぶ色もみえぬころかな（一六三）
 169 時しらぬ身の類こそなかりけれ萩のふる枝も花はさきつつ（一八四）
 170 女郎花おほかる野べにさをしかの猶妻こふる声ぞあやしき（一九二）
 171 やすらはでねなましものを梅花こぬ人の香にははざりせば（一九五）
 172 山里の草のとざしのあけぬまをたよりにさけるあさがほの花（二一四）
 173 まくずはふおなじ籬の花薄うらみぬ袖もしげき露かな（二二〇）
 174 里人はけふぞのばらに出でにける雪まのわかなもえやしぬらん（二二七）
 175 旅人のあさたつ野べのふぢばかま誰しのべとて香をとどむらん（二四四）

大歌合五六、夫木四七七一

新拾遺四〇七、おもひもいれぬ

新続古今三七三

新続古今四一六

- 176 さかしらに初雁なきて過ぎぬなりおのがうゑたるたのもならぬを(二七〇)
- 177 帰るかり別はさこそしたへども秋なたのめそさだめなき身に(二八九)
- 178 つの国の生田のもりの秋も猶すむ人からや人はとふらん(二九八)
- 179 今はまたなれぬる老のねざめとて心もおかずしかもなくなり(三二八)
- 180 春雨のふるの山田も此程やあらすき返すたよりなるらん(三二九)
- 181 霜むすぶ我がもとゆひや知りぬらん枕にうとききりぎりすかな(三五八)
- 182 浪のよるほどをもまたず吹く風にきしの柳のいとぞみだる(三七三)
- 183 友とてやこゑをほにあげて初雁の月のみ舟をさそひきぬらん(四二四)
- 184 山桜いかに契りて椎柴のかはらぬ色に枝かはすらん(四三五)
- 185 草の原かれゆく庭の月影にたがいつはりをまつむしのこゑ(四四四)
- 186 桜花さきぬときけば嶺ふかき松のとほそもまれにあくなり(四四九)
- 187 紅葉せしむかしの秋としのびてや朽木の柚にやどる月かけ(四五八)
- 188 かざこしの山より出づる月なればさぞくもりなき光なるらむ(四六二)
- 189 芳野山花にうつろふ心こそ世をいとふにもなりはじめけれ(四六五)
- 190 いかなればあだし心とみゆる花を身にかふばかりおもひそめけん(五〇一)
- 191 なぞもかく浮世をあきの空にしも月をあはれとながめそめけむ(五〇六)
- 192 はなちらす風ふきたちぬ心さへかたもさだめず成りやはてなん(五三五)
- 193 いかにせむせめては花のなごりとして木ずゑにかかる雲だにもがな(五六一)

夫木九〇一・秋を

- 194 さそはるる風のやどりをいづくともしらせぬ花をなにしたふらん（五六五）
 195 あたら夜のおのがたくひとみし花は散りぬる跡にのこる月かげ（五九九）
 196 此里に入すめとてややましろのゐでの山吹うゑはじめけん（六二二）
 197 しづのめがね屋もる月もさゆる夜は思ひわびてぞ衣うつなる（六六八）
 198 けふだにも春のなごりをとひこかし藤の色こきたそかれの空（六七七）
 199 今朝みればかきねの菊もうつろひぬ花まちどほにいつ思ひけん（六九八）
 200 萩の葉に露おきまよふ夕暮はとふべき物と秋風ぞ吹く（七〇八）
 201 涙さへ秋の物とはいつなりてくるれば人の袖ぬらすらむ（七二二）
 202 山風にもろき木の葉の色のみや秋のかたみとあすはながめん（七三二）
 203 をしめどもとまらぬ春の恨まで今日は今夜ぞ限なりける（七四二）
 夏・冬
 204 みわの山杉の青葉もしぐるなりいかにまたれて冬の来ぬらん（七八〇）
 205 此程はおくてのいねをこくうすく紅葉降りしく冬の山ざと（八〇六）
 206 卯花は散りはてにけり山がつのさらせる布ぞみえず成りぬる（八三五）
 207 しら雪のつもれる庭をよそにみておもひきえぬと人や知るらん（九〇六）
 208 年へたる誰がおも影のとまるらん鏡の山にふれる白雪（九二〇）
 209 おなじくは我にかたらへ時鳥おいそのもりの名をまがへつつ（九三二）
 210 朝雲の晴れせぬ嶺の時鳥うきたる身をやおもひしるらん（九四二）

続古今三七〇

- 211 なほざりにおもひはなさじ時鳥まつ夕暮になきて過ぐるを（九五五）
- 212 道たえて今朝こそいとどさびしけれ雪にかれたる人めならねど（九六六）
- 213 あはれともうしともききつほととぎすながなくころは物をおもへば（九九七）
- 214 うぐひすになくねもかはり名もあらずおやをそむける時鳥かな（一〇〇九）
- 215 五月雨にせきいれぬ水もながれきぬ身をうき草となりやしなまし（一〇二三）
- 216 晴れくもる心さだめぬ時雨だにねざめの空をわすれざりけり（一〇四六）
- 217 霜がれのを花波よる風にさへ野鳥がさきをたつ千鳥かな（一一〇二）
- 218 おもひかねくる人もなき河風を身にしめてなくさ夜千鳥かな（一一一〇）
- 219 あしの葉も霜がれはててつの国のなにはの里やすみあらずらん（一一一四）
- 220 春秋の色をかへたるあはれにもまさりてすめる夏のよの月（一一一九）
- 221 月は猶心を知りてやどるかないた井のし水むすびてもみん（一二二七）
- 222 はかなくもひろへばきゆる玉ざさのうへにみだれてふる霰かな（一二五二）
- 223 ゆふだちの雲のたよりに吹きそめて夏しもあらし風の音かな（一二六三）
- 224 朝露もわきてぞむすぶ独ぬる我とこなつの花ならねども（一二八一）
- 225 心なきしづがいはりのかやり火もおもひ有りとはみえぬものは（一二八九）
- 226 すみわびぬ煙をたえぬなぐさめもしばしばかりぞ冬の山ざと（一二〇〇）
- 227 なげきこる人のみしげき山なれば冬はいづくに身をかくさまし（一二一六）
- 228 冬の池の水のうへになくをしはなれしうきねや恋しかるらむ（一二三六）

続古今六四一

夫木六八九一

229 身にあまるおもひを人にみせむとて袖しの浦にとぶはたるかな（一二三九）

230 さびしくてさびしからぬはうつせみのこゑもたゆまぬ夏の山陰（一二八三）

231 数ならぬかきねにさけば梅の花春にしられぬ契なりけり（一二八八）

232 人ごとに老をむかふるとなみもやすくはみえぬ年の暮かな（一二一〇）

233 里人の待ちける秋の程みえてみそきをいそぐ六月の空（一二一三）

恋・雑

234 はかなしや我だにもとの身をしらでおなじき世をめぐるならひは（一四三三）

235 いかなれば我にもあらぬ心のみそひては物をおもひみだる（一四三六）

236 月も日もおなじ空にぞいでかはる我が身ひとつにさだめなき世か（一四四一）

237 いとはるる我が身と思ふをなぞもかく涙の雨のふりまさるらん（一四四八）

238 みし人のむかしがたりに成りゆくをききてもいとへいとふべきよぞ（一四五三）

239 身のうさも人のつらさも忘れてははかなき世をぞ先かこちける（一四五八）

240 おもひとくうき身のはてか白雲のきえて跡なき夕暮の空（一四七七）

〇 三十六人大歌合（〇・五首）

㍑ 八月十五夜歌合（五首）

241 くるるより雲ふきはらふ風の音に心すめても月をまつかな（一〇）

242 山のはにいまさしのぼる光より名におふ夜半の月はみえけり（五六）

243 月影はゆくともみえずな空に人の心やせきとなるらん（七四）

夫木三二九

夫木七六四八・人ことの

- 244 ながめあかでややいりがたになるままにあはれぞ月に猶のこりける（一二〇）
- 245 いりかかる光もつらくゆく月をたれわが山といまはみるらん（一二八）
- q 続古今集（4・12首）
- 246 なほふかくあはれやそはんふぢばかまぬしさだめたるにはひとおもはば（三五〇）
- 247 はかなくてみえつるゆめのおもかけをいかにねしよとまたやしのばん（一九二）
- 248 はしたかのとがへるやまもしぐるなりかはりやはてん人のことは（二二八）
- 249 いかでまたあかでやみにしおくやまのいはかきしみづかけをだにみん（二三三）
- r 続拾遺集（1・4首）
- 250 たよりあらばとへかし人のあるじとてたのむばかりの花ならねども（四八九）
- s 新後撰集（1・2首）
- 251 風の音もなぐさめがたき山のはに月まちいづるさらしなの郷（三四二）
- t 続千載集（0・2首）
- u 続後拾遺集（0・1首）
- v 夫木抄（18・28首）
- 252 降る雪の花野に出でて賤のめもあさでのわかな今やつむらん（二六一）
- 253 おのれのみ春のしろうぐひすのなけども雪はふるの神杉（三三九）
- 254 さる沢の池の柳やわぎもこがねくたれがみのかたみなるらん（七八四）
- 255 小塩山神代の花や散りにけん匂ひもつきぬ春のしらゆふ（一三二〇）

256 海かけて比良山おろし行きかへり花のしまきのなみたかくみゆ（一四八八）

257 天の川秋とやなれもちぎるらんかた野のみにかへる雁がね（一五九九）

258 清見潟よせてはかへる浪路とやなれもとまらぬ春の雁がね（一六四二）

259 たがためにあはでのもりのしづくかはつまどふしかのたちぬれてなく（四八一）

260 おく露やなみだなるらんさを鹿のつまどふよはのころもでのより（四八一二）

261 わかれにしほどは雲井のかりがねもくるすのをの秋の夕ぐれ（四八九九）

262 たつた山月はこのまに出でそめて松の葉くぐるあまの川なみ（五二二〇）

263 あさなあさなうら風さむみあぢかまのしほつをさして千鳥なくなり（六八二三）

264 つくばねの松のすみがまおしなべてときはにしげくたつけぶりかな（七五六六）

265 はるさめに又ももえなんむさしのやけぶりのちのをぎのやけはら（九七一）

266 かたをかのもりのこずゑをいづるよりみたらしがはに月ぞさやけき（一〇〇一八）

267 はまながはいり塩さむき山おろしにたかしの沖もあれまさるなり（一〇六二二）

268 こぐ舟のあとのしらなみかへりみるうらのみなとぞとほざかりゆく（一一八八〇）

269 海山にたちそふ民のけぶりにて御代のさかりはあらはれにけり（一六五二九）

W 風雅集（0・1首）

X 新千載集（0・1首）

Y 新拾遺集（2・4首）

270 さけばかつうつろふ色をあだなりとみてこそ花に風はふくらめ（二四〇）

271

もらすべき隙こそなけれ忍山しのびてかよふ谷のした水（九四三）

z
新統古今集（0・4首）